

2016年3月20日

於：本郷体育館

東洋学園理事長 江澤雄一

卒業式祝辞

東洋学園大学の卒業生の皆さん、大学院で修士号を授与された皆さん、そしてご両親やご家族の皆様、本日は本当におめでとうございます。本学の所要の課程を修了し、晴れて卒業式を迎えられたことは、ご自身の努力はもとよりですが、それを支えてくださったご家族のおかげであり、感謝の気持を忘れないでほしいと思います。私はこの栄ある卒業式の日、本学の理事長として一言お祝いを申し上げたいと思います。

卒業生の皆さんがこれから舟をこぎ出す外海は大きな変化の流れの中にあります。まず申し上げたいことは、日本の企業は今、こぞって海外にビジネスを展開しようとしていることです。いくつかの例をあげましょう。本学では毎年、現代経営研究会というシンポジウムを開催しており、日本のトップ企業の経営者の方々に来ていただいて、お話を伺っていますが、その中で株式会社ブリヂストンの津谷会長においでいただく機会がありました。ブリヂストンは世界のタイヤメーカーでスポーツ用品なども手がけている大手企業ですが、創業者は石橋正二郎さんという方で純粋の日本企業です。しかし、今や売上の8割以上は海外で、全世界150カ国に200箇所の工場や事業所があります。会長はこれらの海外拠点を順番に廻って、タウンホールミーティングと称して地元従業員とのコミュニケーションの場を設け、意思疎通に努めているとのことでした。会社の役員会は外国人もメンバーに入っているのです、会議は原則として英語だそうです。

もう一つ例をあげると、日本の大手銀行も海外の銀行を買収したり業務提携したりして、国際業務を積極的に拡大していることです。三菱UFJファイナンシャルグループはタイの大手のアユタヤ銀行を買収したのに続いて、最近ではフィリピンのセキュリティバンクに出資して、東南アジアで地元密着した銀行業務を展開しようとしています。今や三菱UFJファイナンシャルグループの利益の半分近くは海外で稼いでいるとのことですから、びっくりします。こうした企業の海外展開は、大手企業だけでなく、中小企業やサービス業にもどんどん広がっているとのことでした。

言うまでもないことですが、日本は人口減少時代に入っており、国内市場や国内ビジネスが縮小していくことは避けられないので、企業は海外に活路を見出そうとしているということでしょう。政府の推計では、現在1億2千万人いる人口が、2050年には1億人を切り、2100年には5千万人を下回ると見込まれています。このような見通しに立てば、国内市場だけに頼っているのは事業の拡大はもちろん、現在の業容を維持することもむずかしい。

そこで先見性のある企業は、世界に居る 70 億人の人口を相手に、海外でのビジネス開拓に打って出ようとしているといえるでしょう。このようなグローバルな企業展開に当って求められているのが、海外で現地の人達とコミュニケーションのできる人材です。海外でビジネスに成功するには、これまで育ってきた日本の社会とは文化も習慣もちがう現地の人達と仲良くなり、その考え方を理解してお互にウィン、ウインの関係を築くことが重要になります。お互が意思疎通できるためには国際共通語である英語が必要だし、世界の多様な文化やものの考え方を理解する上で教養教育、いわゆるリベラルアーツが重要と考えています。本学ではこのような考えから英語教育と教養教育を重視してきましたし、本学で学んだ皆さんがこれからもグローバリゼーションの時代に必要とされる語学力と教養力を更にみがいてほしいと願っています。

そこで外に目を向けると、現在の世界の大きな流れがいくつか見えてきます。今、世界の人々が恐怖におののいているのは、イスラム国やアルカイダなどの国際テロが一向に沈静化しないことです。シリアとイラクの内戦もどう収束するのか見通しが立ちません。そしてこれらの国際テロ組織に志願する世界の若者がいまだに絶えることがないのはなぜなのでしょう。その原因の一つと指摘されているのは、世界における富の格差が拡大していることです。全世界でベストセラーになったフランスの経済学者トーマス・ピケッティの「21 世紀の資本」という本によると、資本主義経済のもとでは資本の収益率が経済全体の成長率よりも高いため、資本を持っている人は一般の人より多くの収益を得ることができるようになります。このため豊かな人は益々豊かになり、富の格差がどんどん拡大していくというわけです。例えばアメリカの場合、人口の 10 パーセントの富裕層の人達が全体の富の実に 70 パーセントを保有していると言うのです。しかも、その富の半分は 1 パーセントの人に集中しているとのこと。このように富が偏在することで人口の大半を占める中間層の不満が高まっているといえるでしょう。現在のアメリカの大統領選挙ではこの中間層の不満が大きくなっているといえますし、世界における紛争やテロの背景にはこの富の世界的な偏在の問題が重くのしかかっているといえると思います。

今日の世界におけるもう一つの問題は、国際社会におけるアメリカの絶対的な優位が崩れ、世界が多極化していることでしょう。戦後の米ソ間の東西冷戦が 1989 年のベルリンの壁崩壊をもって終結して、アメリカのリーダーシップのもとで、ヨーロッパ、日本を含むいわゆる G7 諸国によって国際秩序が形成されてきました。その後、中国、インド、ブラジルなどの新興国が経済的に発展し、発言力も増してきたので、これらの国を含めて G-20 という新しい枠組が生まれましたが、これら新興国は自国の利益を守ることに重点があり、新しい国際秩序づくりに取組むという姿勢は乏しいといえます。こうして世界が多極化していく中で強力なグローバルリーダーシップが失われてきているといわれます。この現状をアメリカの政治学者イアン・ブレマーが「G ゼロの世界」と呼んで話題になりました。ア

アメリカが世界の警察官であることをやめた時、世界の秩序をどうやって維持していくのか、グローバル化が進展する中で世界は大きな課題に直面しているといえます。

世界における富の格差の問題や国際秩序の構築の課題はいずれも容易に解決できる事柄ではありません。しかし、日本も国際社会の、しかも先進国の一員として、これらの課題に向きあい、公正で平和な世界を構築するために少しでも貢献していくことが求められており、それが日本自身の存立と安全を守る上でも必要になってきていると思います。

話は変わりますが、去年はラグビーの日本代表チームが南アフリカを破って、一躍世界に名をはせました。その日本代表のヘッドコーチだったエディ・ジョーンズは今、イングランド代表の監督を務めています。その彼が選手たちに言ったことは、これまで安住していた環境を打ちこわし、極限まで自分を追い込むこと、そして自主性をもって自ら努力すること、その努力があっただけで世界に伍して闘うことができる、というのです。考えてみると、これは本学の建学の精神「自強不息」（自らたゆまず努力すること）に通ずるものがあると思います。しかし、エディはもう一つ、選手たちには英語を勉強してほしいと言っています。ラグビーの世界の共通言語は英語です。コーチの指示を受けるのも、チームメートとの意思疎通も、試合中の審判との交渉も、いずれも英語です。世界レベルのラグビー選手になりたければ英語を話せることが必要だと言っています。

以上いろいろなお話をしましたがビジネスの世界はもちろん、NGO やボランティア活動、更にはスポーツや文化交流の面でも、世界で活躍するには英語によるコミュニケーション力と異文化理解のための教養力が欠かせないことを改めて強調したいと思います。本学の卒業生の皆さんには今後、世界で大きく羽ばたいてもらいたい、そのために本学での教育が大事な糧になることを心から願っています。

皆さんご卒業本当におめでとうございました。